アーキビストの眼

―初学者のアーカイブズ学への視点

―国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』（上・下）を読んで―

清　水　善　仁

I

国文学研究資料館史料館（現在は国文学研究資料館アーカイブズ研究系と組織変更されているが、本稿では以下史料館の名称を用いる）の前身である文部省史料館が設立されたのは1951（昭和26）年５月30日のこと、その翌年の1952（昭和27）年には近世史料取扱講習会が始まっている（のち史料管理学研修会に改編、現在はアーカイブズ・カレッジ）。それからの半世紀余、日本におけるアーカイブズ学の確立とその発展に中核的な役割を果たし、現在もその役を担い続けている史料館から、2003（平成15）年10月、『アーカイブズの科学』と題する論集が刊行された。本書は1996（平成８）年度から５年間にわたって史料館において実施された特定研究「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」の成果の一部が基となっている。上・下２巻の本書は上巻を「記録史料と文書館」、下巻を「記録史料の管理」とし、５部構成をとっている。執筆者は史料館内外の研究者40名、論稿（章）は41本を数え、実に広範囲にわたる内容のそれを含んでいる。そのことはすなわち、アーカイブズ学研究の対象と課題の多様さを示すものであるとも言える。

すでに刊行されて２年以上が経とうとしている本書については、多くの学術雑誌において書評や紹介といった形で取り上げられている。またこの間にもアーカイブズ学をめぐる研究動向や社会状況は様々な分野で着実に進展しつつあるように思う。そこで本稿では、それらの状況を適宜ふまえながら、本書に掲載されている全論稿についてその内容を紹介する。その上で、アーカイブズ学初学者である筆者（清水、以下同）が本書を通読して思い至ったいくつかの点について、最後に記することとしたい。

II

この項では本書掲載の全論稿について、その概要を紹介し、適宜若干の私見を述べたい。

序　アーカイブズの科学とは（丑木幸男氏）

本章は本書全体の総論である。アーカイブズ学への導入的な位置づけをもち、同時に本書の基本的な考え方を提示する。まず「アーカイブズ」の定義に触れ、日本のアーカイブズをめぐる歴史的変遷、現状からみた課題の提起があり、本書の構成とその意図に言及がなされる。アーカイブズ学を「公文書・私文書を問わず、日々発生する記録から歴史的文化的価値の定まった記録史料までを、一貫した理論で把握することをめざ」す学問とし、そのために３つの研究課題を設定する。本書の内容もまたこの課題に適応して構成されている。すなわち、①記録史料の特性・本質の研究をⅠ部、②文書館についての研究をⅡ部、③記録史料保存管理の研究をⅢ・Ⅳ・Ⅴ部とし、以後各論が展開される。

＊しみず　よしひと：中央大学大学院文学研究科日本史学専攻
Yoshihito SHIMIZU

Ⅰ部　情報とアーカイブズ

Ⅰ部は、記録史料としてのアーカイブズを中心に、情報・記憶・記録の意味とその関係性を考察することによって「記録史料の本質、特性を歴史的にアプローチ」する（１編）。また、アーカイブズ学を関連科学から考察することで、その確立と展望がなされる（２編）。２編は１編と比較してかなり性格を異にする内容のように思えるが、「情報とアーカイブズ」という課題について、関連科学はどのようにこれを検討しているのか、そしてその方法はアーカイブズ学の視点から考察するときどのように捕捉できるのかという観点に立てば、Ⅰ部に相応しい課題として位置づけられるだろう。

１編は「情報と記憶・記録」である。本編では「人間の諸活動と情報・記憶・記録の関わりの歩みを社会構造や組織体の変化のなかで検討し、（中略）各時代の記録史料の存在形態と機能の歴史を、各時代における社会と組織体のありかたに注目して考察」される。近年のアーカイブズ学研究では特に記憶をめぐる議論が活発であり、2004年に開かれたICA（国際文書館評議会）大会のテーマも「アーカイブズ・記憶・知識」であった。こうした記憶の問題をアーカイブズ学の視点からどのように捉えていくのか、情報・記録との関係を含め歴史的考察を中心に各章で議論が展開される。

「１章　情報と記憶」（保立道久氏）は、本章でも紹介されている通り、人間と情報、記憶・記録との関わりの歩みを記録史料の位置を中心に論じたものである。情報と記憶の問題の一般的構造を捕捉した上で、情報の文字化を貨幣や通信システムなどから解明し、記憶から記録への移行を、文書主義の観点に触れつつ検討する。情報と記憶・記録の関係性が明確化される本章は、１編の総論的位置づけである。

「２章　文書と記憶の比較史―播州三木とグレート・ヤーマス」（渡辺浩一氏）は、特に記憶の問題について、播州三木とグレート・ヤーマス（イングランド）という二つの都市の事例から検討したもので、〈都市の特権〉の危機から、文書保管の方法が模索され、やがてそれが歴史叙述へと発展していくという両者の共通点を指摘する。その一方で両者における文書保管や歴史叙述の内実は異なっており、それらの指摘は興味深い。その相違がどこから生じるのか、渡辺氏は「儀式との関係の違いに由来」し、さらにアーカイブズに対する意識の相違を指摘されているが、ここにはまさにアーカイブズの機能や存在形態、そしてそれらと記憶がどのように関係づけられるのかという重要な課題の提起があるように思う。なお、播州三木の歴史叙述については、同氏著『まちの記憶―播州三木町の歴史叙述―』（清文堂、2004年）がより詳細である。

「３章　中世の組織体と記録」（富田正弘氏）は、日本中世における記録史料を授受する組織体（＝「家」）の特質について、官僚官人、「公家」、武士（鎌倉将軍家・北条（得宗）家・関東公方家・守護家・室町将軍家）、寺社を別個に検討し、それぞれの組織体に残された記録史料の特徴を明らかにしている。本章を読んで改めて感じることは、組織体研究の重要性である。この場合、組織体＝「家」は記録の発生母体であり、アーカイブズ学において当該視角の検討は史料群の構造認識や目録編成の前提として不可欠な作業である。各々の「家」に関する歴史的変遷の詳細な研究は、その重要性を再認識させてくれる。

「４章　中世寺院史料とその「目録」」（永村眞氏）は、中世寺院史料を素材に、当時使用されていた「目録」の役割や編成意図、そしてそれにともなう史料管理について検討する。このなかで中世寺院における「目録」には①いわゆるガイドとしての「目録」と、②宗教的機能をもつ「目録」の２種類の要素があったことを指摘され、その上で寺院における「目録」の本来的意味を重視されている。なお、本章のなかで、聖教を収納する「経蔵」や櫃には極めて濃厚な宗教的存在意義があることを指摘されているが、これは本編２章で

渡辺氏が指摘された宝蔵の結界論と通じるものがあるような気がした。するとそこには、保管される文書とそこから派生する文書保管空間への副次的意味づけという点において、興味深い事例が存在することになる。これは予てから渡辺氏が提起されている史料空間論の視角として捉えられるのだろう。

「５章　近世の社会・組織体と記録―近世文書の特質とその歴史的背景」(大藤修氏)は、近世社会における記録史料の存在形態と機能を検討する。近世社会は前代と比較にならないほどの文書記録の増加をもたらしたが、その要因について当該期の社会や組織体から解明を試み、その結果、官僚制的整備・文書主義の浸透・文書の種類の多様化などの点を挙げている。また保存管理形態の側面から、文書の様式・料紙・形態の特徴についても言及がなされる。

「６章　近現代の組織体と記録―公文書の世界と私文書の世界」(丑木幸男氏)は、古文書学・史料学研究における近現代史料研究の遅れを指摘した上で、公文書と私文書の関連の解明をおこなうことにより、近現代記録史料の機能や特質を検討している。公文書と私文書は伝える情報が異質であるだけに有機的な関連を持つものであると指摘し、群馬県の星野家文書という記録史料群を用いて公文書と私文書の関連性を具体的に考察する。すなわち、公文書のなかの私文書／私文書のなかの公文書のそれぞれの意味を検討し、そのことで当該期の記録史料の特質に迫っている。

「７章　コンピュータ社会における集合的記憶」(青山英幸氏)は、現在では既に人類の生活に深く浸透した科学技術とりわけコンピュータを取り上げ、アーカイブズの世界で今や重要な課題となっている電子記録・電子記録管理の点を情報・記録・集合的記憶の側面から検討したものである。ここでは、コンピュータ社会到来の歴史的変遷、当該社会におけるコミュニケーションの構造と情報の様相、そうした社会における記録の把握方法、そして文書館における電子記録管理体制への指摘がなされる。すでに本格化しつつあるコンピュータ社会のなかでの情報・記憶・記録をどう捕捉していくのか、これからのアーカイブズ学にとって重要な課題である。

２編は「アーカイブズ学と関連科学」である。隣接する諸科学からアーカイブズ学を考察することによって、「学際的性格の強いアーカイブズ学の確立を展望」する。１編で展開された情報・記憶・記録そしてアーカイブズを科学的に把握する方法論を、隣接諸科学の示唆を得つつ現状とその課題への指摘がある。

「１章　アーカイブズ学の地平」(安藤正人氏)は、２編の総論的位置づけとして、現代アーカイブズ学を取り巻く諸状況を、アーカイブズ学の理論を紹介しつつ、その今日的動向を検討する。具体的には、アーカイブズ学の構造、電子記録時代の到来によるアーカイブズ学理論の根本的変革の要請（パラダイム・シフト)、それにともなう新たな理論モデルの模索、そして日本のアーカイブズ学の抱える課題への指摘がある。最後の課題の提起では、地域におけるアーカイブズ活動の具体的方法、および戦争による「記憶の抹殺」とその再生の重要性を訴えているが、特に前者について言えば、市町村合併の推進される今日こそ「地域の記憶」をどう残すかという点は重要な指摘であるように感じる。なお、この問題に関連して、地方史研究協議会は以前「民間所在史料のゆくえ―文書館・公文書館の役割を考え直す―」という企画例会を開催しており、その議論は大変示唆に富むものである（詳細は『地方史研究』314号、2005年４月、を参照)。

「２章　アーカイブズ学と歴史学」(渡辺浩一氏)は、両学の方法論の共通点・相違点について論じるとともに、文書館が歴史学の対象となりつつある点について、その具体相を検討することで両学の関係を明らかにする。前者については、史料群に対する認識について、出所の組織構造の解明の必要性という点で両学の共通性が見られつつあることを指摘し、後者については、両学の研究視点の相違

から共通性が見られないことを指摘する。

「３章　アーカイブズと文化情報」（保坂裕興氏）は、文化や情報、アーカイブズの利用について、記号学や哲学の視点からこれを検討したものである。ソシュールの言語学・記号学の紹介により情報の原理を探求し、その上で記録史料からの〈過去の事実〉探究という点を考察する。そして最後にこれらの課題についてアーカイブズに引きつけて指摘がなされる。

「４章　アーカイブズと図書館情報学―メタデータの相互運用性」（永田治樹氏）は、「メタデータ」という両学に共通するタームからアーカイブズ学と図書館情報学の関係を検討する。ここで特に重視されるのはインターネット・コモンズにおける多コミュニティ間での情報資源の共有化の際、コミュニティ横断的なメタデータの確保についての相互運用性の視点である。ダブリンコア（メタデータ要素セット）の特徴、情報の相互運用性に向けた様々な取り組み、そしてクロスウォーク（メタデータのマッピング）への指摘がある。LMA連携の議論が活発な昨今、メタデータを視角とする本稿の持つ意味は重要である。

「５章　アーカイブズと博物館・博物館学」（君塚仁彦氏）は、博物館・博物館学からみたアーカイブズとの関係性への指摘である。博物館の定義や機能をふまえた上で、博物館におけるアーカイブズ理論の導入（「群」としての資料認識など）を確認し、ついでアート・ドキュメンテーション研究の動向に言及する。周知のことだが、日本では博物館に記録史料群が所蔵されることは多く見られるところであり、そうした史料群に対する編成・記述の点など今後とも多くの点で博物館・博物館学とは議論し連携していかなければならないと思う。両者の有意義な関係の構築は君塚氏もまた指摘するところである。

「６章　軍事関係史料の戦後史―情報公開法の施行と日本近代史研究」（吉田裕氏）は、アジア太平洋戦争敗戦後の軍事関係史料の処理と現在の公開状況を考察する。敗戦前後における軍関係文書の組織的焼却と隠匿、GHQによる軍関係文書の押収とその返還に関する変遷と現代の課題、そしてさらに議論を拡大して情報公開法の問題点を歴史学の立場から検討している。アーカイブズ自身が辿ってきた歴史と、これから辿るであろう道程の諸相の解明は、アーカイブズ学にとって重要な課題であり、その課題に本章は歴史学から接近したものである。

「７章　戦争の記憶、戦争の記録―「従軍慰安婦」関係記録の問題を例として」（吉見義明氏）は、戦争に関わる記憶・記録の諸相を「従軍慰安婦」問題を事例として検討したものである。その点では本編６章と近似する内容であり、同様の指摘もある。戦争をアーカイブズ学の視点から捉える方法は安藤正人氏・加藤聖文氏らによる研究がすでにあるが、この視点に連なる研究として本章は位置づけられよう。日本と海外における「従軍慰安婦」関係資料の現状とその特徴への指摘があり、オーラル・ヒストリー・アーカイブズやレコード・センターの設置の必要性など今後の方向性への指摘がある。

「８章　東南アジアにおけるオーラル・ヒストリーの試み」（倉沢愛子氏）は、現在アーカイブズの世界で注目されるオーラル・ヒストリーに関する論稿である。アーカイブズ学におけるオーラル・ヒストリーは本編１章で安藤正人氏が「アーカイブズ活動の重要な一部」と述べるように、重要な課題として位置づけられている。本章で展開される東南アジアでのオーラル・ヒストリーは、戦争前後の影響による文書の不足を補うために文書館を中心に始まったオーラル・ヒストリーが、今や重要な歴史史料として位置づけられているとし、インドネシア・シンガポール・フィリピンの事例を基にその特徴を紹介したものである。「語り」とそれを支える「記憶」をいかに捉えていくのか、その信憑性なども含めて大変難しい問題ではあるが、アーカイブズ学がオーラル・ヒストリーにどう取り組んでいくのか、喫緊の課題である。

Ⅱ部　文書館とアーキビスト

Ⅱ部は、Ⅰ部が記録史料としてのアーカイブズに重点が置かれていたことに対し、文書館など記録史料保存利用機関としてのアーカイブズやそれを支えるアーキビストの役割の議論に重点が置かれる。

１編「アーカイブズ・システム論」は「文書館を中心とした記録史料保存管理の理念と課題を考察」する。

「１章　記録史料管理政策論」（石原一則氏）は、１編の総論にあたる。まずフランス革命以降の近代的アーカイブズの形成とレコード・マネジメントの発展に関する指摘があり、そのなかで登場した「記録のライフサイクル」概念を取り上げる。その上で文書管理・移管・評価選別といったアーカイブズ・システムをめぐる諸課題を提示し、それを受けたアーカイブズ自身が今後どのような観点を目指すべきなのか、その方向性への指摘がある。

「２章　情報公開制度と公文書館制度―文書のライフサイクルをどう管理するか」（渡辺佳子氏）は、「公文書」という同じ基盤を持ちながら、しかしその性質は全く異なる両制度について、その関係を整理し、その上で両制度をつなぐ文書のライフサイクルについての検討がある。そのなかで両制度の関係をクリアにするひとつの方法として、文書管理に関する法規の整備の必要性が重視されている。この点については、多くの機関や団体が予てから法律の制定に関する提言をおこなっていることは周知の通りであるが、いまだその実現をみていない。ただ、近年の政府や国会議員間における文書管理・保存に対する認識の高まりは注目すべきものではあるだろう。

「３章　文書館の利用と普及―利用者論の観点から」（白井哲哉氏）は、文書館における利用・普及活動を利用者論の視点から分析したもので、文書館利用者像の歴史的変遷とそれにともなう普及活動の再検討への指摘がある。そしてそのなかで専門職員の果たすべき役割を重視し、アーキビスト制度の早期確立を求める。利用普及論の検討にあたって、文書館が対象としての利用者をどう位置づけているのかを考察することは重要であり、その分析の上で普及活動の再検討と専門職員の重視を指摘する本章の論旨は、非常に説得力がある。

「４章　アーキビスト教育論」（安藤正人氏）は、日本におけるアーキビストの教育と養成のあり方を考えるために、世界的な観点からアーキビストのあり方の原則に触れ、２１世紀の日本のアーキビスト教育への提言をおこなうことで、アーキビスト教育・養成の現在と未来を展望する。プロフェッションとしてのアーキビストの社会的役割を民主主義と世界平和に貢献する存在と位置づけ、そうしたアーキビストの教育について、世界の現状と課題に触れた上で、日本のアーキビスト教育の現状と展望を述べる。本編１～３章で、公文書館制度の役割が近年さらに重視されつつあることの指摘があったが、本章ではそれを支えるプロフェッションとしてのアーキビストの社会的意義が強調されている。本章を読むと、改めてアーキビスト制度の早期確立の必要性を強く感じる。

２編「文書館の立地環境と施設」は、文書館の設計や建築、防災対策など文書館のいわばハード面の諸課題への指摘である。その意味で１編とは色合いが異なるが、しかし本編１章で青木睦氏が「（文書館の―引用者註）建築論はアーカイブズの本質をもととする機能をあらゆる形で論じることが求められる」と述べるように、両者は鋭く接近する課題と言える。

「１章　文書館建築設計の基本」（青木睦氏）は、上記のような観点から、アーカイブズ・システムがより有効に機能するような建築設計の重要性を指摘する。建築設計におけるアーキビストの役割、文書館の立地環境、文書館内部の空間構成など議論は多岐に及ぶ。そのなかで文書館の施設機能の整理がなされ、設計時の留意点が細かく示される。文書館の建築設計には利用者・職員・記録史料保存・

経済性など様々な視点が必要となり、そのなかでアーキビストがそれらをどうまとめあげていくのかということが重視されている。

「２章　文書館災害対策論」（小川雄二郎氏）は、文書館における災害の諸相とそれへの対策を検討する。小川氏は冒頭で「文書館の扱う資料の保存期間を考慮すると、（中略）めったにこない甚大な災害でも、資料にとっては必ず遭遇する災害であることになる」と述べるが、まさに真摯に受けとめるべき指摘であり、記録史料の側に立った防災対策の発想である。本章では、２０世紀の世界の文書館の被害状況、災害（火災・水害・落下）による被害とそれへの防止策、戦争による被害と文書館の対応策、防災対策として常日頃認識しておくべきことがそれぞれ論じられる。近年の世界・日本の災害状況を考えるに、防災対策はつねに喫緊の課題であり、本章はその点で多くの示唆を与えてくれる。

Ⅲ部　日本のアーカイブズの構造

Ⅲ部は、「記録史料の整理と目録編成の前提として、わが国の記録史料管理の実態に関する論考を収録」している。Ⅲ部から下巻となるが、先記の通り下巻の表題は「記録史料の管理」である。アーカイブズ学の視点に立脚する史料整理・目録編成の前提としての史料群構造認識の持つ意味の重要性が、５章にわたり近世・近現代の事例から論じられている。

「１章　アーカイブズを理解する―史料群構造論の展開」（大友一雄氏）は、日本各地に伝存する多種多様なアーカイブズの構造を理解するための方法論と当該研究の現状と課題に触れる。大友氏によれば、史料群構造の理解の目的は理論的な史料整理・管理のためであるとされる。本章はⅢ部の総論である。

「２章　近世領主文書の伝来と構造」（福田千鶴氏）は、目録編成の前提としての史料群構造の把握の指針を、領主文書を事例として考察したものである。対象としての大名文書の伝来についてその状況を整理した上で、津軽家文書・真田家文書の構造を分析し、そこから目録編成論に言及がなされる。そして最後に文書群の現用秩序復元の課題として３つの方法を提起する。福田氏のこの提起は復元の難しい領主文書群の復元研究にとっていずれも重要な指摘である。

「３章　近世地方文書の史料群構造―山城国相楽郡西法花野村浅田家文書中の狛組大庄屋文書を素材として」（冨善一敏氏）は、２章に続く史料群構造研究で、地方文書（浅田家文書）を対象に検討がなされる。特に本章の注目視点は浅田家文書所収の大庄屋文書に関する引継目録からの検討で、ここから文書群構造の一端を垣間見、その上で当該期の文書認識にも言及される。本章では引継目録の内容が詳細に掲載されており、その内容は非常に興味深い。

「４章　近現代公文書の史料群構造」（鈴江英一氏）は、近現代史料特に公文書について北海道立文書館所蔵の“簿書”（開拓使文書など）を事例としてその内部構造を検討し、あわせて文書の類目に注目し、そこから史料群構造の解明に切り込む。本章で特に鈴江氏が強調しているのは、経年変化の視点である。氏は近著『近現代史料の管理と史料認識』（北海道大学図書刊行会、2002年）においても同様の主張をおこなっているが、近現代史料の場合は氏も指摘するように業務体系の様々な側面が現代まで継続している以上、それらを踏まえた上での目録編成の視点が不可欠であり、その指摘は重要である。

「５章　近代の企業記録」（小風秀雅氏）は、企業アーカイブズを対象とする。企業記録をどのように理解し、利用・保存するかという課題において、まず企業資料とは何かという問題をアーカイブズ学の視点からその目的を明確にし、その上で公文書と私文書の双方の性格を兼ね備えている企業資料の特徴を指摘し、体系的な保存のための企業史料の体系性の試論を提示する。小風氏の指摘にあるごとく企業資料を対象としたアーカイブズ学的な研究は少ないが、体系性の理論化によって企業活動が明確化されるとすれば、すなわちそ

れはコンテクストの明確化の一面ともなり、ひいてはそれが企業資料の目録編成論にも連繋していけるのではないかと思う。そのように考えるとき、氏の指摘は大変重要である。

Ⅳ部　アーカイバル・コントロール

Ⅳ部の表題である「アーカイバル・コントロール」とは、記録の生成と保存、そして記録史料となり利用公開される一連のプロセスを制御（コントロール）し統一的に把握するというもので、現在では当該議論を表現する概念として広く用いられることが多くなっている。なお、「アーカイバル・コントロール」については本書でも適宜解説されているが、より詳しい内容については、青山英幸氏著『記録から記録史料へ―アーカイバル・コントロール論序説』（岩田書院、2002年）を参照されたい。

１編「ドキュメンテーション・プログラム」は、特に記録管理論、評価選別論、史料調査論を取り上げ、記録から記録史料へという一連のプログラムを把握するための論点について議論が展開される。

「１章　アーカイブズを残す」（鈴江英一氏）は、１編の総論としてドキュメンテーション・プログラムに関わる諸論点を歴史的変遷の視点から論じる。まず取り上げる戦後の史料保存運動は記録管理の前史であり史料調査の意義への指摘である。また現代公文書の保存については、記録管理論・評価選別論と密接な関係がある。これらを歴史的に踏まえ、その時々で発生した問題点とその意義を検討する。

「２章　評価選別論の歩みと現在」（石原一則氏）は、ドキュメンテーション・プログラムの一論点である評価選別論の研究史整理である。その視点は評価選別の基準それ自体を構成する概念の説明を志向するところにある。本章では評価選別の意味を明確にした上で、評価選別をめぐるドイツ・イギリス・アメリカの議論を紹介しそれぞれに検討を加えている。そして最後に現在の評価選別論の趨勢に触れ、「価値」と「証拠」の２つの基準を取り上げて、両者に共有される志向として評価選別を社会のコンテクストのなかに置いていることを指摘している。

「３章　組織体の記録管理」（戸島昭氏）は、ドキュメンテーション・プログラムの論点のうち記録管理論の視点である。本章では日本国内の組織体を区分した上でそれぞれの組織体における記録管理の現状と課題を紹介する。その意図は記録から記録史料への移行という視点の拡大と普及を促進するもので、それが民主主義社会の成熟と環境保全型社会の構築のための情報資源たりうるとの指摘である。各々の組織体における記録管理の記述は詳細で学ぶところが少なくなかった。一様に記録管理と言っても、組織体の別によって多様な形態と方法があることを知るべきであるということを改めて痛感した。

「４章　公文書の評価と選別の手法」（水口政次氏）は、本編２章が評価選別概念の歴史的変遷と研究史整理をおこなったのに対し、本章は評価選別の方法が議論の論点となる。まず評価選別の方法論をめぐる現状について、収集（選別）基準や実践例に触れ各館での相違点と共通点を指摘する。つぎに評価選別方法論のこれまでの議論の展開を紹介し、そうした流れの上で現状の課題に触れ、最後に今後の方向性についての展望がある。水口氏はこのなかで各文書館間の連携とアーキビスト養成を挙げ、かつ理論と実践の協調のための調査研究の必要性にも言及する。

「５章　地域史料調査論」（高橋実氏）は、史料調査論の視点である。ドキュメンテーション・プログラムにはその対象範囲として公文書のみならず地域史料も含まれる。その場合、地域史料の収集やその方法論的な視点は史料調査論として把握される。本章では史料調査論の視点や方法論に関する研究史と現状への指摘があり、中間番号方式の具体的提言、そして各種史料調査会の近年の動向に検討が及ぶ。また補論においては、文書館学（記録史料学）的史料整理論への批判に対する高橋

氏の見解が示される。文書館学（記録史料学）的史料整理論をめぐっては、かつて高橋氏をはじめ安藤正人氏・吉田伸之氏らによる論争が展開されたが、ここではその後の近年の議論に対する指摘があり、史料整理論の今日的動向が把握できる。

２編「アーカイバル・データの構築と提供」は、編成論・記述論・検索システム論・情報提供論がその対象となる。本編では日本の近世・近現代史料の目録編成・記述論から国際的な記述標準化、そして電子化の問題など非常に幅広い議論が展開される。

「１章　アーカイブズ編成・情報化論の現在」（青山英幸氏）は、２編の総論である。記録史料の「整理」のプロセスを、図書館情報学の動向に触れることで「情報学」として再認識し、これを記録史料の情報コントロールとして位置づけている。日本における標準化への問題点に関する指摘があり、その上で記録史料の編成・記述・検索システムの構築の諸課題を「アーカイバル・コントロール論」の視点から改めて提起する。

「２章　アーカイブズの編成と記述―近世史料を中心に」（山崎圭氏）は、目録編成・記述論を主題として、それを近世史料を事例として検討する。まず史料目録論の歴史的変遷への指摘があり、それを『史料館所蔵史料目録』の編成・記述方法の検討から実証する。その上で基本目録を中心に編成・記述方法の具体的提示があり、それを基にした事例研究がなされる。

「３章　アーカイブズの編成と記述―近現代史料をめぐる課題」（加藤聖文氏）は、近現代史料が対象となる。本章では近現代史料の特徴と編成・記述のあり方について公文書・私文書に分けて検討される。その上でアーカイブズ学の立場からの今後の課題への指摘がある。本編２章が事例研究であったのに対し、本章は課題提起的な色合いが強い。その点で両論文の力点は異なっているが、しかしこの２つの視点はいずれの議論にも提起される方法・課題であり、その意味では両者を通読することによって、近世・近現代を通じた記録史料の編成・記述論の現状と課題がより明らかになる。例えば、本章では近現代私文書の特徴として文書群所蔵先の分散が指摘されているが、これは近世史料にも当てはまることである。その一例を挙げれば、近世・近代の公家・華族である久世家の記録史料群（久世家文書）は現在、国文学研究資料館・明治大学博物館・中央大学図書館など数ヶ所に所蔵されており、目録の編成・記述方法もすべて異なっている。そうしたなかで当該史料群をどのように把握し、編成・記述していくべきかという大きな課題がある。このような意味でも両論文における指摘は時代の別を超えて重要なものが少なくない。

「４章　アーカイブズの編成と記述標準化―国際的動向を中心に」（森本祥子氏）は、アーカイバル・コントロール論のなかで国際標準という国際的な視点を検討し、記録史料記述の標準化への動向とそれへの日本の対応が中心に論じられる。ISAD（G）などICAの国際標準の概要に触れ、またその後の動向（EADなど）について指摘し、今後の標準化の流れに言及がある。アーカイブズ情報の国際交換・共有の必要性は、本章に限らず本書の随所に見られるところであり、国際標準の策定や世界各国での記述標準化への営為に対して、日本においてもそれらの検討と実践例の蓄積がなされているところである。森本氏は「国際標準は（中略）情報を共有する際の共通語」と記しているが、本章の内容はその指摘の実証として大変説得力がある。

「５章　アーカイブズ情報の電子化とネットワーク―電子的検索手段の国際規格」（五島敏芳氏）は、アーカイブズ情報の電子化をめぐる諸課題を取り上げたもので、検索システム論に関わる論稿である。本章では特に電子的検索手段の国際規格であるEAD・EACの構成について、それぞれが対応するISAD（G）・ISAAR（CPF）の記述要素と関連させて検討し、効率的な電子的検索手段の構築への指摘がある。しかし日本ではいまだ当該国際規格

による実践例が少なく、五島氏は国際規格導入の重要性を挙げ、それこそが〈共通語〉の理解につながると指摘する。本章でも本編4章同様「共通語」の指摘がある。国際標準や国際規格はその有効な活用によって世界各国の人々と理解しあえるための言語ということである。

「6章　アーカイブズ情報管理システムと検索手段」(山田哲好氏)は、アーカイブズ情報の管理システムと検索手段の構築について、史料館での実践例を基に具体的な紹介があり、そこでの現状と課題に触れる。同館で構築しているデータベースや各種システムにおける諸課題の提示は具体的であるだけに理解しやすく、そこにはシステム構築や検索手段という範疇を越えたアーカイブズに対する認識などの大きな問題もまた包含しているように思えた。

V部　アーカイブズの保存と修復

V部は、アーカイブズの保存修復に関する論稿を収載し、それによって「保存修復の基本理念を提示し、ついで保存環境、予防措置、修復技術について検討」がなされる。いずれも具体的な数値や技術に基づいた論稿である。

「1章　アーカイブズの保存とは」(青木睦氏)は、V部の総論である。次章以降の議論の前提としてアーカイブズの保存と修復をめぐる歴史と現状そして課題に言及がなされている。具体的にはまず「保存」「修復」の意味を明確化することによって研究範囲を提示し、ついでアーカイブズ学における記録史料保存管理の理論と実践に触れ、近年の当該テーマに関わる動向を検討し、最後に保存修復専門職(コンサベーター)のあり方を海外の事例を踏まえて考察する。保存修復の問題は本章でも指摘があるように、近年では電子化の動向とも関わりをもち、一方で従来の紙史料の保存修復論の発展の必要性もある。青木氏は本章の最初で「伝統的技術や新しい保存科学への理解を深めることを目的」とするとしたが、そうした視点は今後ますます重要になってくるものと思われる。

「2章　保存環境コントロール」(稲葉政満氏・二宮修治氏・木川りか氏・荒井宏子氏)は、アーカイブズが保存されるにあたって大きな影響を与える様々な環境因子について、「1　温度・湿度・光」(稲葉氏)・「2　空気環境」(二宮氏)・「3　生物被害」(木川氏)の3つの視角からの検討があり、その上でそうした環境因子の影響を最小限に抑える役割を果たすものとしての「4　包装材料」への指摘が、今日的課題の点(稲葉氏)と、実例として写真資料を取り上げそれに対する包装材料への検討がある(荒井氏)。各々の環境因子がアーカイブズに与える影響とそれへの対策が各論とも詳細に書かれており、実際の作業や対策にあたっては大変有用である。

「3章　予防措置と実際」(大湾ゆかり氏・荒井宏子氏・新井浩文氏)は、近年アーカイブズ保存において浸透しつつある「治療より予防」という予防措置の重要性の高まりのなかで、その理念と実際を検討したものである。具体的には、予防の段階的措置の必要性とその方法(大湾氏)、具体例としての写真画像保存における予防措置の方法(荒井氏)、そして予防措置としての複製化・代替化の意義と事例(種類)と展望(課題点)への指摘がある(新井氏)。3氏の議論に共通する点は、保存目的と保存計画の明確化であり、そのなかで必要な予防措置を展開すべきというところにある。

「4章　修復技術の新たな発展」(増田勝彦氏・金山正子氏)は、修復技術についてその概要と実際の方法を論じたものである。まず、海外におけるアーカイブズの修復技術の発展を概観した上で(増田氏)、そうした修復技術の実際を、和紙史料・洋紙資料・彩色史料に分けて解説し、修復にあたっての留意点(修復の仕様と記録化)を指摘する(金山氏)。

Ⅲ

以上、本書の全論稿についてその概要を記し、各所において若干の私見を述べさせてい

ただいた。日本におけるアーカイブズとアーカイブズ学のこれまでの歴史と研究蓄積、そして現状の把握とこれからの課題の提示について、多方面からの考察がなされる本書からは、数多くのことを学んだ。今後、本書がアーカイブズ学の基本書となることは疑いないことであろう。

最後に、本書を通読しての感想および本書を通して考えた筆者なりのアーカイブズ学への視点を記することによって、本稿の擱筆としたいと思う。

本書を通読しての感想

何よりも感じたことは、アーカイブズ学の学問的裾野の広大さである。アーカイブズ学が過去・現在・未来に対してつねに視線を向けるべき学問であることは本書を通してより深く理解できたが、歴史学的な検討から保存科学的視点まで、あまりにその観点と方法論は幅広い。逆に言えば、それこそがアーカイブズ学の特色なのであろう。「そもそも日本のアーカイブズ学自体いまだ黎明期」（安藤正人氏「あとがき」）という指摘があるが、上記のように裾野が広いだけに課題もまた山積している。それは本書で提起されたもののみならず、本書では触れられなかった課題もある。ただそれらについては「あとがき」で述べられているところであり、改めてその一つひとつを本稿で取り上げることはしない。また社会やアーカイブズ・アーカイブズ学をめぐる状況の変化にともない、現状では予想し得ないような課題が浮上してくるかもしれない。電子記録をめぐる取扱などは今後おそらくその好例となり得るであろうと思う。

ではそうした様々な課題をどうするべきか、アーカイブズ学自体がいまだ黎明期であるならば、今以上に歴史学や情報学・保存科学などの関連科学や図書館・博物館・美術館などの類縁機関とより強い連携を保ちつつ、さらなる研究の深化を図らなければなるまい。史料館や執筆者各位をはじめ、文書館に勤めておられる方々は、日々こうした課題に直面しつつ、それへの方法や対策を検討し実践されている。そうした実践から得た経験を基にした諸課題への理論的検討や、それらの研究の蓄積、そして諸科学との連携によるアーカイブズ学の深化は、やがてより多くのアーカイブズを未来の人々に伝えてゆくことになると確信する。

また本書では諸外国のアーカイブズ学研究が積極的に取り入れられている。そのことも非常に特徴的であった。これは本書「はしがき」（丑木幸男氏）でも特色として述べられていることであるが、アーカイブズ学やアーカイブズ制度が確立している諸外国の理論や実践から学ぶことが決して少なくないことは、本書の諸論稿を読めば明らかである。本書「あとがき」において「もちろん、外国の研究成果を導入すればいいという問題ではないが、アーカイブズ学を学問として育て日本に定着させるのが目的である以上、世界との学問的ギャップは早急に埋める必要がある」との指摘がある通り、黎明期たる日本のアーカイブズ学にとって諸外国のアーカイブズ学を学び取り入れていくことは今後とも必要とされるだろう。ただその際には、日本と諸外国の社会やシステムの相違を前提とした上で、日本において発展してきた史料学その他の理論や方法も視野に入れつつ検討を進めていくことが不可欠であろう。そしてそうした蓄積のなかから「世界のアーカイブズ学の一翼を担っていく」（「あとがき」）日本のアーカイブズ学が、その独自性と共に次第に構築されていくのだと思う。本書の刊行はその意味で、非常に大きな意義を持っているものと言える。

アーカイブズ学への視点

唐突な話で恐縮だが、歴史学研究を専攻している筆者がアーカイブズ学に関心を持ち始めたのは、アーカイブズ学が歴史学にとって不可欠な学問であると思ったからであった。史料の保存や整理を通して、それらを未来に継承していくことの重要性を訴えるアーカイブズ学に素直に共感した。歴史研究は当然な

がら史料がなければ成立しない。だから史料を守り伝える文書館とそれを支えるアーカイブズ学は、歴史学を学ぶ者も知識として備えておかなければならない。そのように考えたがゆえに、当初は歴史学との関わりからしかアーカイブズ学を捉えることができないでいた。

しかし、アーカイブズ学に関する研究会やシンポジウムへの参加を通して、次第にその考え方は変わり始め、本書を読んでそれは決定的となった。アーカイブズ学は歴史研究のみにとどまらない、広く社会との関わりのなかで捉えなければならないということである。情報・記憶・記録史料・現代記録・電子記録といった様々なテーマを網羅し、それらに関する理論と実践を議論し共有する。そしてその蓄積が社会におけるアーカイブズ学の重要性への認識をより高めることになる。本書の豊富な内容がその役割を十二分に果たしていることは、初学者の筆者にも理解できる。社会におけるアーカイブズとアーカイブズ学のもつ多様な役割とその意義への指摘が、本書の随所に盛り込まれているからである。

本書を読み終えて一つ考えることがある。紙媒体から電子媒体へという大きなパラダイム・シフトのなかで、人間はこれから記録とどう向き合っていくのかということを一人ひとりが真剣に考えなければならないということである。ある記録を保存するにしても廃棄するにしても、このパラダイム・シフトは例えば作業効率の点で大きくそれを簡略化させる。電子媒体の記録であれば、ワンクリックで削除（廃棄）や複製（写し・控え）が可能になるし、さらに言えば削除した記録を復元することすらできる（「アーカイブズ学の地平」参照）。そのこと自体を否定するつもりは毛頭ないが、しかしそこに記録の希少性や真正性といった観念が紙媒体のそれに比べて生じにくくなることは想像に難くない。人間は文字を発明して以来、記録と歩みを共にしてきたわけだが、ここにきてその記録自体の意味や捉え方が大きく変わろうとしているのである。

そうした状況において人間が記録といかに向き合っていくのかということを検討する場合、やはり人間にとっての記録の意味を過去から現在にわたって考察する必要があるだろう。本書においてもその分析は多方面からなされているが、その検討は記録に対する分析にとどまらず、実は人間に対する分析でもあるのだと思う。それは「アーカイブズは社会的な存在である人間の活動を反映」しているからであり、「活動を展開した個人、組織、社会のあり方に規定されて作成」されるからである（「アーカイブズの科学とは」）。人間と記録という両者の関係の検討はアーカイブズ学研究のあらゆる課題に直結する。その意味では、アーカイブズ学を捉える一つの視点として、“人間科学としてのアーカイブズ学”ということを指摘することも可能なのかもしれない。

以上思いつくままに記したので飛躍したところが少なくないと思う。ただ本書を通して、アーカイブズ学が記録やアーカイブズのみならず、社会や人間の探究にも関わる学問なのではないかと率直に感じたことから記した次第である。

とはいえ、初学者の筆者にはまだまだアーカイブズ学の様々な文献を読み、しっかりとその基礎を勉強しなければならないという大きな課題がある。生易しい課題ではない。しかし、その際には本書を手元に置いておく。そして疑問に悩むときには本書を開く。筆者にとって本書はアーカイブズ学の道標であり、座右の書なのである。

末尾になったが、筆者の浅学ゆえに各論稿内容の誤読など多々あったかもしれない。それらの点については執筆者各位にお詫びを申し上げるとともに、ご寛恕を乞う次第である。

［付記］

本稿は本来ならば「書評と紹介」欄に掲載される予定であったが、編集・出版委員会のご判断により「アーキビストの眼」欄に掲載

されることになった。しかし、筆者は文書館での勤務経験はなく、したがってアーキビストと名乗れる者ではない。筆者のアーカイブズとの関わりは、文書館の利用者としてのそれであり、またアーカイブズ学を学び始めた学生としてのそれである。したがって本稿の表題を「一初学者のアーカイブズ学への視点」とした。この点をお断りしておきたい。

国文学研究資料館史料館編
『アーカイブズの科学』（上・下）
柏書房　2003年10月
Ａ５判　上巻446ｐ、下巻440ｐ